

60406

教科書文庫

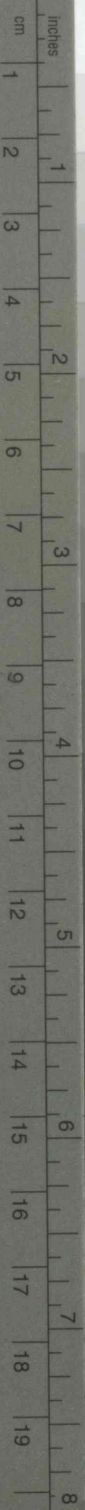
6
810
74-1949
01304 49653

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教育學部
資料室

柳田国男編

あたらしいこくご 三年 下

小KC
To112

教
3
01



中央図書館

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449653



あたらしい
こくご

三
年

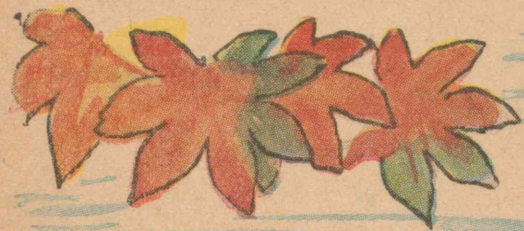


広島大学図書
0130449653

広島大学
教育学部図書

東京書籍株式会社

広島大学図書
0130449653



もくろく

一 空……………四

(一) 雲

(二) にじ

(三) 空

二 ラジオ……………十一

三 学級文庫……………二十二

(一) 自治会

(二) 話し合い

(三) 学級文庫

四 ぼくは 電気だ……………三十六

五 山の 子ども……………四十六

六 一つの ことばから……………六十五

(一) 変わる ことば

(二) ことばあそび

七 家ちく……………七十二

(一) あきらさんの 家て

(二) はるおさんの 家て

八 着物……………八十八

九 ふね……………百

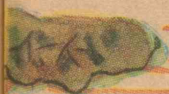
(一) ふねの 発達

(二) コンプスの 発見

べんきょうの 手びき……………百十三

新しく 出た おもな ことば……………百二十二

新しく 出た かんじ……………百二十五



一 空

(一) 雲

雲は おもしろい。

じっと 見て いると、

何かの 形に

だんだん にて くる。

ひつじの ような

雲も ある。



つばめの ような

雲も ある。

あ、あの 雲は

こたつに あたって いる。

おじいさんの ようだ。

むらさきの 雲、

白い 雲、

夕やけ空の

赤い 雲。

うすく たなびく



海の雲。

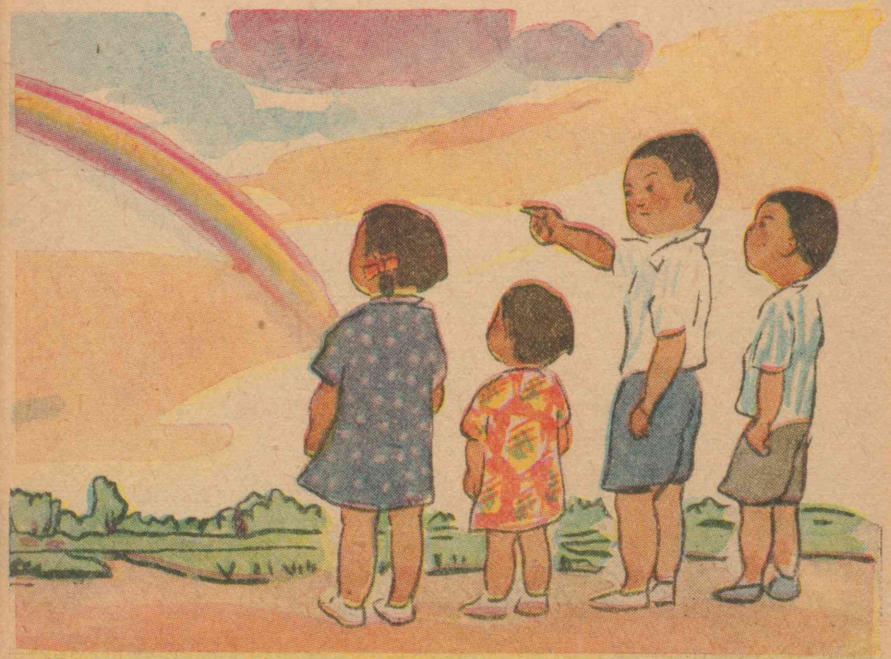
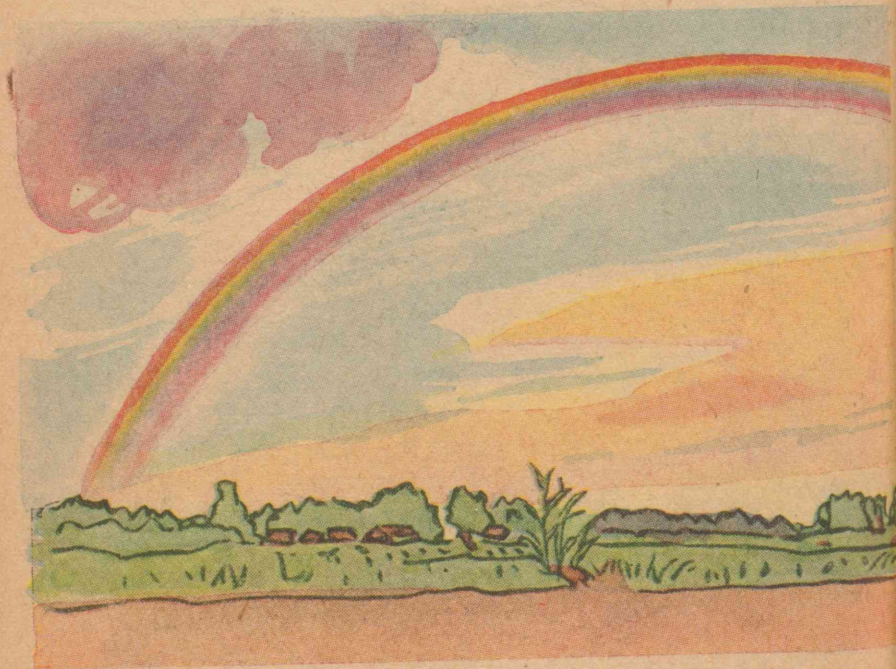
一つの雲が
走って来ると、
また一つの雲が
おっかけて来る。
風の日の空は
雲のうん動会だ。

(二) にじ

うちのまどから

あれ あれ きれい、
お空にかかる
にじの橋。
赤 青 黄の
にじの橋。

おどぎの国へ
わたる橋、
月の国へも
行ける橋。
赤 青 黄の



にじの 橋。

森の 中から
野原の 方へ
お空に かかる
にじの 橋。
赤 青 黄の
にじの 橋。

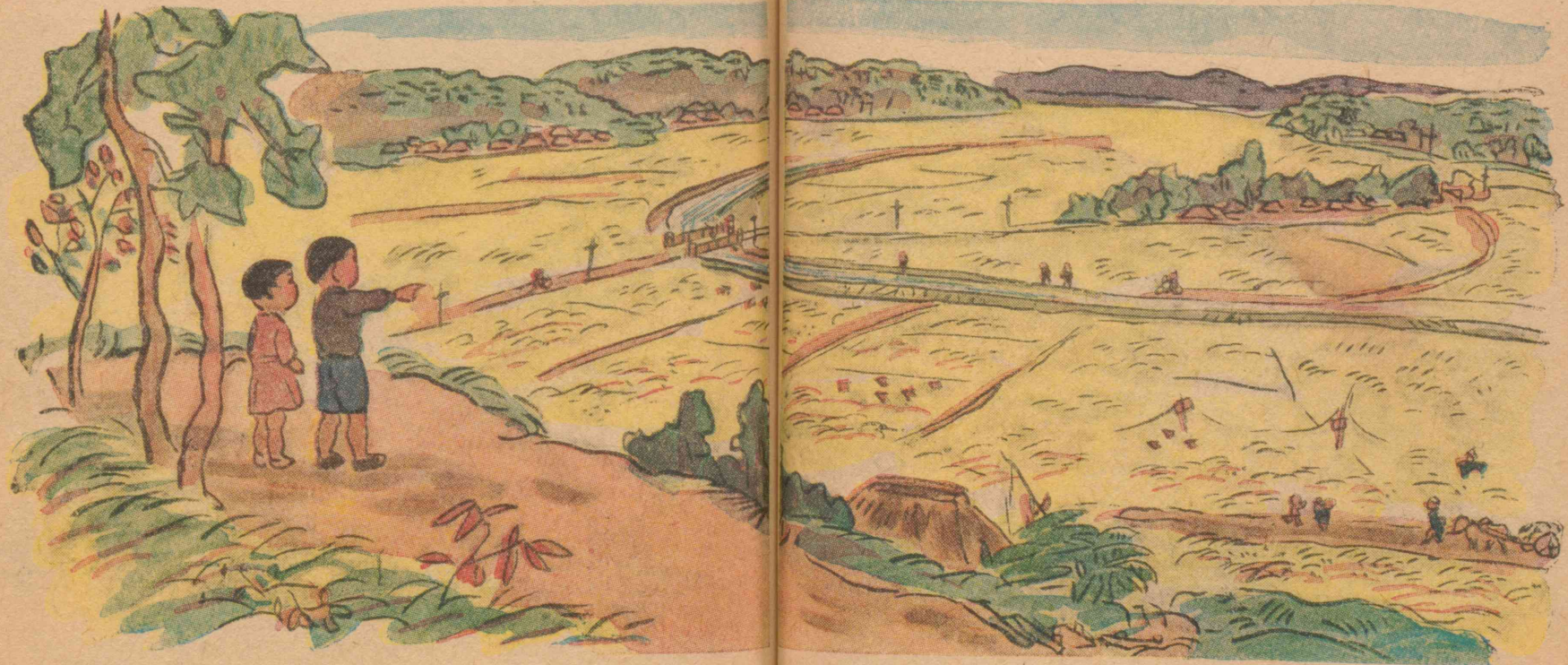
(三) 空

高く すんでる

秋の 空だ。

いなほは みんな
頭を たれた。
見わたす かぎり
こがねの 波だ。

なるこを 引いて
すずめを おえば、
かかしの かが
ゆらゆら ゆれる。



雲が 流れる
秋の 空だ。
まきばの 馬が
一声 ないた。
見わたす かぎり
すすきの 原だ。

ああ、ひろびろと
空 ひろがって、
馬 いななけば
空まで ひびく。



二 ラジオ

(一)

朝、目が さめると 明かるく 晴れた 空が 見えま
した。にわの かきの 木に、まっかに うれた かきの
実が、つやつやと 朝の 日ざしを うけて いました。
ぼくは いつものように 元気 よく 学校へ 行きま
した。三時間目が 国語の 時間でした。先生が ラジオ
を かけて くださいました。

「きょうは みんなで 作文の ほうそうを 聞こう。そ



して あとで かんそうを み
んなで 話し合おう。
そう 行って、先生が ラジオ
の スイッチを いれました。す
ると 音楽が 聞えて きて、ま
もなく 学校ほうそうが はじま
りました。
一ばん はじめは 金魚と い
う 作文でした。

金魚

わたくしの うちには、今 五

ひきの 金魚が かって あります。 去年の 夏、おとう
さんに 買って いただいたのです。

五ひきの 金魚は、ガラスの 金魚ばちの 中で、きれ
いな おを ゆらりゆらりと 動かして およいで いま
す。まるで 花が 水の中 ぱっと さいたように
見えます。時には 五ひきの 金魚が 七ひきぐらい い
るように 見える ことも あります。

学校から 帰ると、わたくしは よく 金魚ばちの 水
をかえて やります。新しい いど水に かえて やる
と、金魚は うれしそうに 口を ぱくぱく させて 水
を のんだり はいたり します。

金魚は さむく になると、あまり えさを たべなく
なります。そして 冬に になると、金魚ばちの 底の 方
に じっと して います。わたくしは そんな 時には
死ぬのでは ないかと 心配で たまりません。

二ばん目は おふろと いう 作文でした。

おふろ

ぼくの うちでは 一日おきに おふろを わかします。
おふろ場は いどの 近くに あります。おかあさんが
ふろおけを あらった あとで、たいてい おじいさんが
水を くみます。ぼくも ときどき 手つたいます。

おふろの 火は みんなで たきます。うら山に 落ち
て いる たきぎを 拾って 来るのは ぼくの 仕事で
す。

かわかした たきぎを もやすと、どんどん もえて
おふろは すぐ あつく なります。

ぼくは おじいさんか おとうさんと いっしょに は
います。

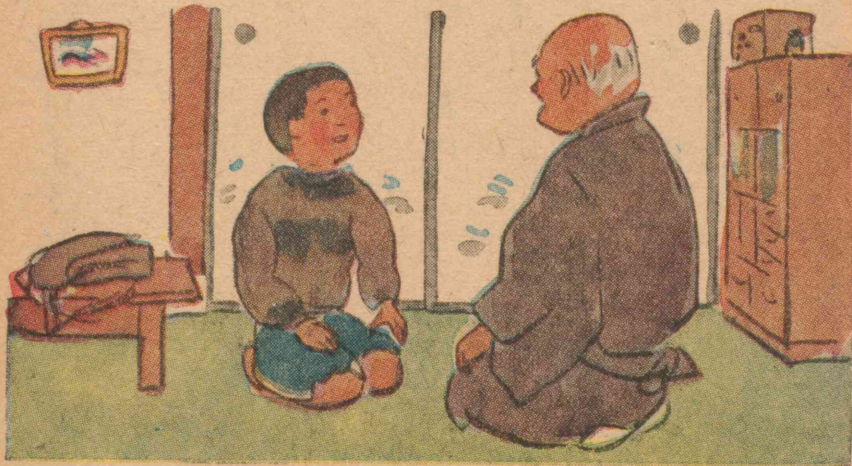
きのうは おじいさんと はいりました。ぼくは おじ
いさんの せなかを 流して あげました。おじいさんが
ぼくの せなかを あらって くださいました。

三ばん目は 秋と いう 作文でした。
 一台の ラジオを かこんで 三年生の ぼくたちは
 みんな いっしょうけんめいに 聞きました。
 学校ほうそうが 終ると、
 「さあ、これから みんなで かんそうを 行って ござ
 んなさい。」
 と、先生が おっしゃいました。みんなは かんそうを
 話し合いました。

一ばん よい 作文は 金魚に きまりました。

(二)

おじい 「あきら、きょう、おじいさ
 んは おもしろい ほうそ
 うを 聞いたよ。」
 さあきら 「どんな ほうそうでしたか。
 ぼくも 聞きたかったなあ。」
 おじい 「学校ほうそうだ。三年生が
 作文を よんで いたよ。」
 さあきら 「それなら ぼくも 学校で
 聞きました。」
 おじい 「それは よかったね。もし
 あきらが 聞いて いなか



「だったら、そのお話をしてあげようと思っ
いたんだよ。ほんとうにみんなじょうずだっ
ね。」

「先生がきみたちもこんなにじょうずに作れ
るかねと、お聞きになりました。」

「それであきはなんといったの。」

「ぼくもじょうずに書きますよ。いいました。」

「それではできたら見せてもらおうかね。」

「ぼくはラジオというだいで作文を書きま
すから、よんでください。」

「学校ではあきはたちはどこでラジオを聞く

の。」

「きょうしつで聞きます。」

「あきはたちの組では、きょうのほうそを聞
いてどの作文をよいと思っただかな。」

「金魚です。」

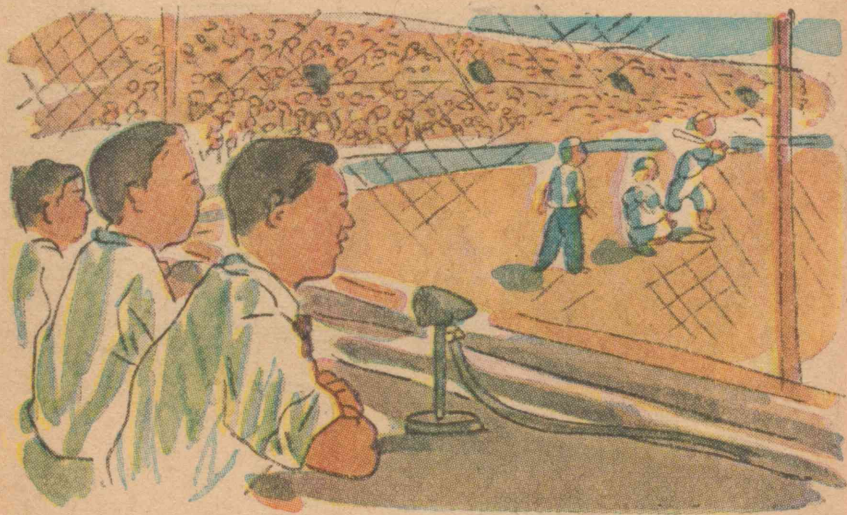
「そうかい。おじいさんもそう思っただよ。あ

きはどんなほうそがすきなの。」

「野球のほうそが一ばんすきです。」

「そうかい。おじいさんもすきだよ。」

(三)



よかったと 思う ことが い
くども あります。
おもしろい ほうそうの あ
る 時は 家中 そろって 聞
きます。
ぼくは 子どもほうそうきよ
くが できれば よいなど 思
います。子どもの ために お
話や 音楽や じっきょうほう
そうなどを して くれれば
よいと 思います。

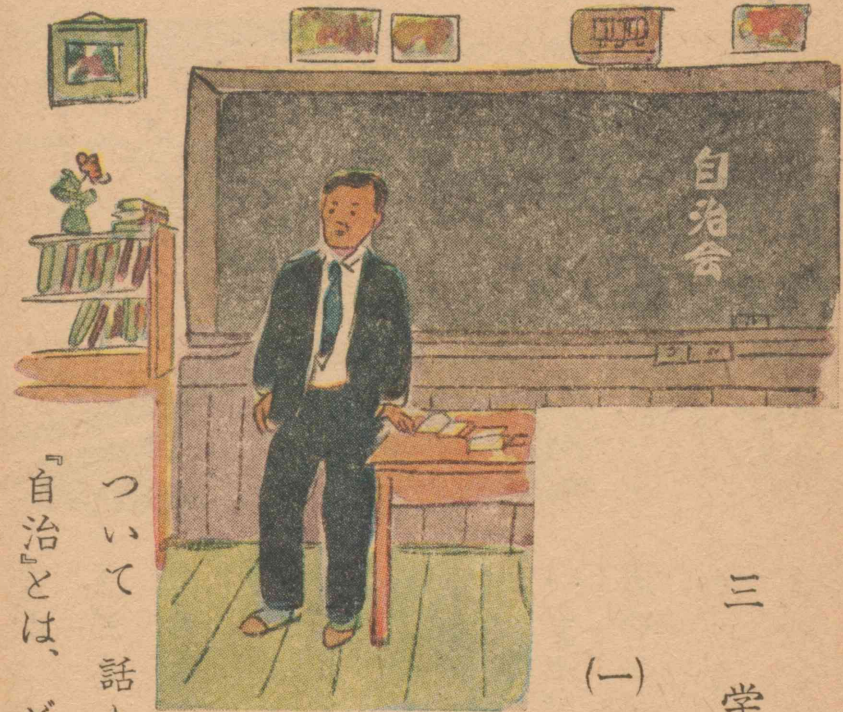
ラジオ

ぼくは ラジオが すきです。
ラジオは いろいろな ことを 知らせて くれます。
野球の ほうそうは ほんとうに 見て いるように 知
らせて くれます。

おじいさんは ラジオの 天気よほうを いつも よく
聞いて います。ぼくが 学校へ 行く 時、
「あきら、きょうは 昼から 雨が ふるかも しれない
よ。かさを 持って 行きなさい。」
と、ちゅういして くれます。
おじいさんの いう とおり、かさを 持って 行って

三 学級文庫

(一) 自治会

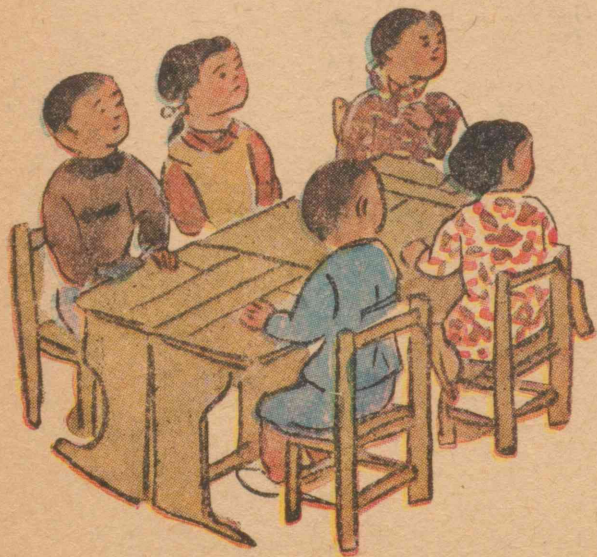


ある日、先生が
黒板に「自治会」と
書きました。
「きょうは自治会
と いう ことに
ついて 話し合いましよう。まず
『自治』とは、どんな ことを いうの」

か、知って いる 人は 手を あげて ください。
先生は こう 言って、みんなの かおを 見まわしま
した。はじめは だれも あげませんでした。しばらく
して、山田くんが 手を あ
げました。

「山田くん、いって ください」
い。

「自分の ことは 自分で
すると いう ことです。」
「そうですね。では、『自治会』
とは どんな ことを す



る 会でしようか。」

こんどは 大川さんが、

「はい。」

と、手を あげて 答えました。

「わたくしたち みんなの ために なる ことを、みんな
なで 話し合って きめる 会です。」

「そうです。」

先生は そう 言って 黒板に、

「自治会——みんな 力を 合わせて、みんなの ために
なる ことを、みんなで 話し合って きめる、みんな
の 会。」

と 書きました。

自治会と いう ことが みんなに よく わかりまし
た。

そこで 先生は、

「それでは、みんなの ために なる ことを、これから
みんなで 話し合って みましよう。」

と いいました。

木村くんが 手を あげて、

「ときどき えんそくに 行ったら よいと 思います。」
と いいました。

上野さんが、



と
いいました。あちらでもこちらでも

「きょうしつの中をもっと
きれいにしたら 気持がよ
いから、みんなの ためにな
ると 思います。」

と
いいました。
三ばん目に 大川さんが、
「わたくしは 学級文庫を 作れ
ば よいと 思います。」

と
いいますと、山田くんも、
「ぼくも そう 思います。」

「さんせい さんせい。」

と
いう 声があがりました。

先生は にこにこ しながら、

「大川さんは 大へん よい ことに 気が つきましたね。それでは、みんなであしたまでに、学級文庫のことを 考えて 来る ことに しましょう。」
と
いいました。

(二) 話し合い

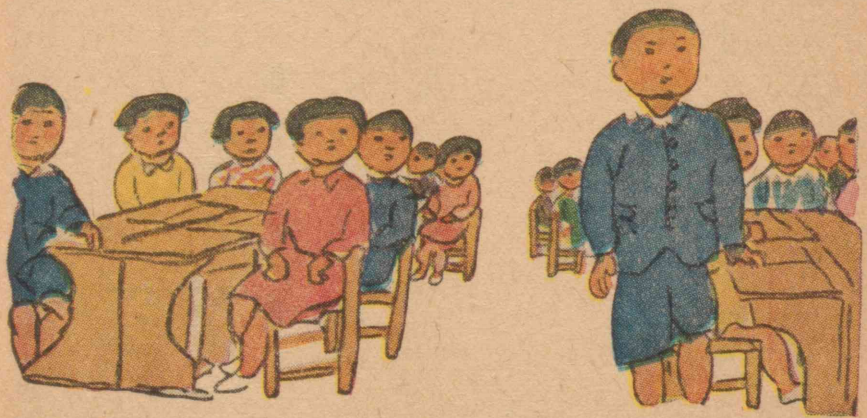
先生「きょうは 学級文庫を 作るには どう すれば
よいか、みんなて 話し合っ て みましょう。」

山田くん、何かよい考
えが ありますか。

山田 「はい。ぼくは まい月 みる
んなで お金を 出し合っ
て、いろいろな 本を 買
って 来る ことを 考え
ました。」

先生 「その 本を だれが 買っ
て 来るのですか。」

山田 「先生に おねがいすれば
よいと 思いました。」



先生 「ほかに だれか 考えた 人は ありませんか。」

—— はい、大川さん。」

大川 「わたくしは みんなの うちに ある 本を あつ
めて、学級文庫を 作る ことを 考えました。」

上野さんが 「はい。」と 手を あげました。

先生 「上野さん。」

上野 「わたくしは みんなの たんじょう日に 一さつず
つ 買って、持って 来る ことを 考えました。」

先生 「いろいろ 考えて 来ましたね。ほかに ありませ
んか。—— はい、木村くん。」

木村 「にいさんや ねえさんが よんで しまった 本を

もらって 来れば よいと 思います。」

先生 「木村くんの にいさんと ねえさんは 何年生ですか。」

木村 「にいさんは 中学一年です。ねえさんは 五年生です。」

先生 「それでは みんなには すこし むずかしいかも しれませんね。まだ その ほかに ありませんか。みんなは だまって います。」

先生 「もう ほかに ないようですから、先生の 考えを 話しましょう。—— さいしよに 山田くんの 考えた、まい月 お金を あつめると いうのは、学用

品を 買うのに お金が たくさん いらいますから、先生は さんせい できません。つぎに 上野さんの 考えた、たんじょう日に 一さつずつ 買って 来るのも あまり さんせい できません。やはり お金を つかう ことに なりますから。しかし、そんな ことを いては 学級文庫は できませんね。そこで 先生は 大川さんが いった ように、みんなが おとうさんや おかあさんに 買って いただいた 本の うち、一さつか 二さつ 持って 来る ことに さんせいします。よごれた 本でも よい ことに しましょう。」

土屋「古い ぎっしりでも かまいませんか。」

先生「かまいませんとも。」

どまつも「ひょうしが とれたのでも よいでしうか。」

先生「いいですとも。ひょうしの とれた 本は、工作の 時間に なおしましう。」

(三) 学級文庫

ぼくらの 学級文庫が できた。みんなで 一さつか 二さつずつ 持って 来た ものが、七十五さつに なった。

きょうしつの すみに 先生が 本だなを 作って ぐ



ださった。ひょうしの とれた 本は、工作の 時間に みんなで なおした。山田くんと 大川さんと ぼくの 三人が いいんに なって、全部の本に ばんごうを

つけた。かし出しの ちようめんを 作って、うちでも

よめるように した。

ある 日、先生が、

「みんなの よろこぶ ことが あるよ。おとうさんや

先生たちで 作って い
る ピー テー エーか
ら こんど ひとつの
組に 五十さつずつ 本
を くださる ことに
なったのだよ。
と おっしゃった。
ぼくらは わあっと よ
ろこんだ。

ぼくらの 学級文庫が
百二十五さつに なる。本



だなも いっぱいに なるだろう。かし出しも いそがし
くなるだろう。ぼくが、

「ぼくたち、学校で よむ ひまが なくなるね。」

と いうと、大川さんは、

「みんなの ために なる ことだから、どんなに いそ
がしくても かまわないわ。」

と いった。

ほんとうに 大川さんの いう とおりだ。ぼくは、

「ぼくも いそがしくても 平気さ。本は 借りて 行っ
て 家でも よめるからね。」

と いった。

四 ぼくは 電気だ

ブルルン ブルルン
ザッザッザッザッザッザ

おや、へんだぞ。

なんだか ひどく やかましい。

そうだ、ぼくは 生まれたんだ。

なんだか 元気が 出て きたぞ。

ぼくは 電気だ。

ぼくは 電気だ。

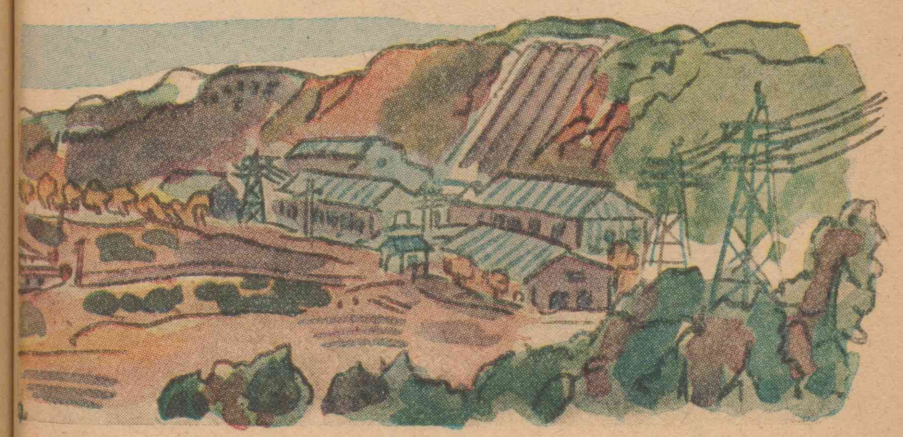
そうだ。発電きさんが

ぼくを 今 うんで くれたのだ。

ぼくは 電気だ。

ぼくは 力が ある。

ぼくは なんでも やりとげる。



さあ、村へ 行こう。
町へ 行こう。

ぼくは 走る。

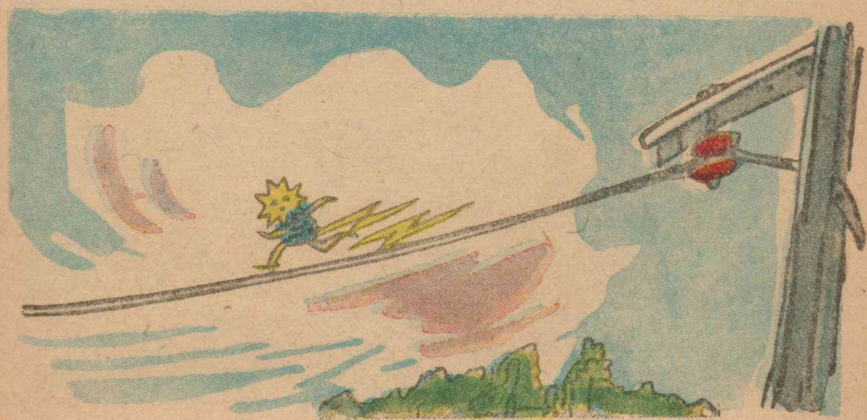
そう電線を 走る。

広い 野を こえ、

深い 谷を こえ、

そう電線は つづいて いる。

山 山 山。



ぼくは 全速力で 走る。
おや、村が 見えるぞ。

「数十人の 声
ちよつと おりて ください。」

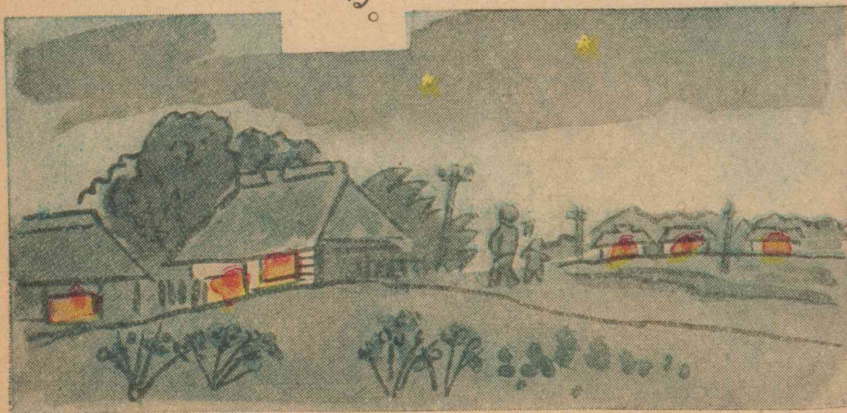
電燈を つけて ください。」

ぼくは ちよつと より道を する。

村に あかあか 電燈が ともる。

ぼくは また 走る。

おや、こんどは 町だ。



「数百人の声
精米きを動かして ください。
電燈をつけて ください。」

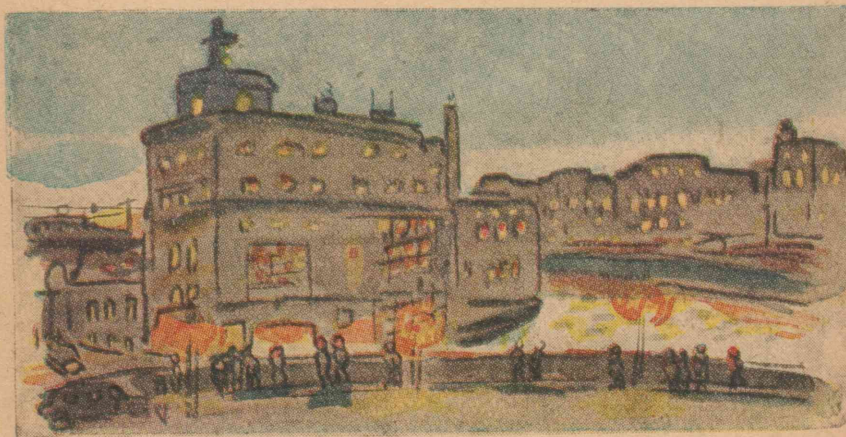
ぼくは ちよつと より道を する。
町に あかあか 電燈が つく。
精米きが 動き出す。

ぼくは また 走る。
全速力で 走る。
どんどん 走る。



山 谷 川。
大きな 川。
海が 見えるぞ。
おや、都会だ。

むこうの 山からも
その また むこうの 山からも、
そう電線が 都会に あつまって
いる。



ぼくたちの なかまが、
あちらからも こちらからも、
たくさん 全速力で 走って 来る。

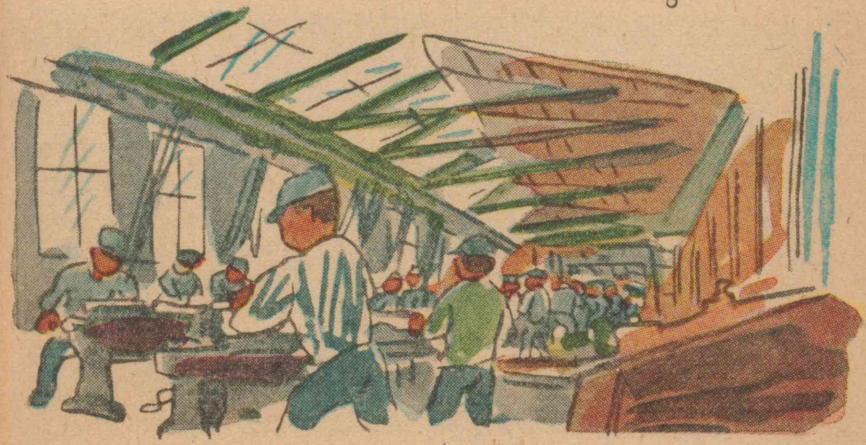
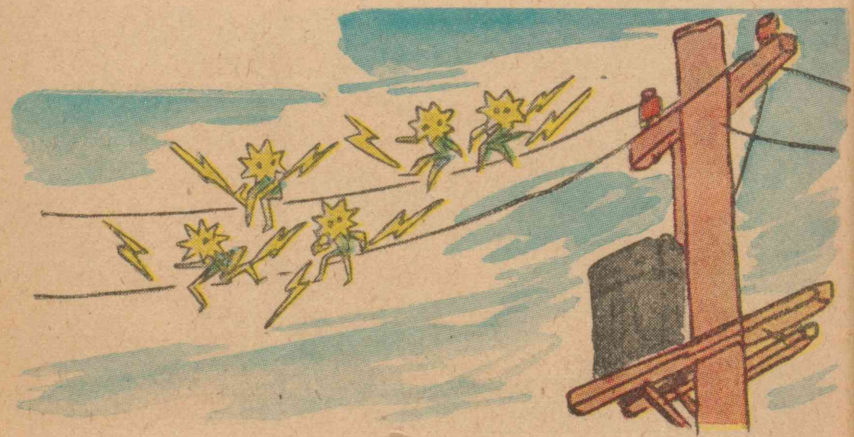
少年たちの声
ぼくたちの 家を 明かるく し
て ください。
少女たちの声
町を 明かるく して ください。
数千人の声
工場の きかいを 動かして ください。
べつの数千人の声
電車や 汽車を 走らせて ください。
さい。

これは いそがしい。
手分けして はたらこう。

電気一
ぼくは 電車を 動かすぞ。
電気二
ぼくは 工場の きかいを

動かすぞ。
電気三
ぼくは えいがかんへ 行こう。
電気四
ぼくは ほうそうきよくへ 行こう。
電気五
ぼくは 公園の 電燈を つけよう。

ぼくは みんなに わかれて



またひとりで走る。

町のにぎやかな通りをどびこえる。

ぼくはよくべんきょうする

少年をさがそう。

「おうい、べんきょうしている

少年はいないか。」

「どこかでここに

いるよ。」

いたいた。

ぼくはまっしぐらにかけつける。

電柱からまどぎわへ

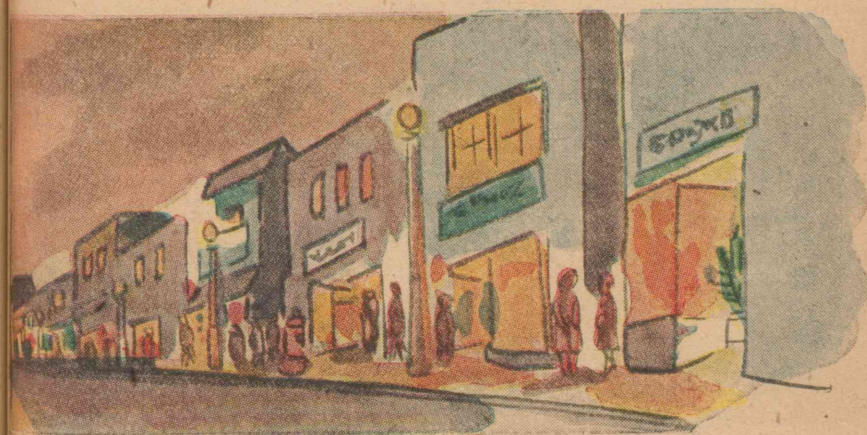
べんきょうべやへ

そしてやっとなちどまる。

ぼくは電燈に火をともす。

明かるい明かるい

火をともす。



五 山の子ども



「きょうは先生が作った紙しばいをしましょう。だいは『山の子どもです。』
ある日、先生がこう
ういいました。
みんなはぱちぱちと
手をたたきました。



から、あめは降りませんよ。
どいいましたので、みんなは

先生は大きな紙ぶくろの中から、ひとかさねの絵を取り出しました。両手で絵のはしをおさえ、つくえの上に立てて、
「この紙しばいがすんでも、先生は紙しばい屋さんではない」
どっとわらいました。

1 ある 山おくに 三げんの
 家が ありました。どの 家に
 も おとうさんと おかあさん
 と 子どもが、ひとりずつ 住
 んで いました。三げんとも
 家から ずっと はなれた 所
 で、毎日 炭を やいて くら
 しを たてて いました。三人
 の 子どもは、まさおくん、あ
 きおくん、みつ子さんと いい
 ました。まさおくんと あきお



くんは 三年生、みつ子さんは 二年生で、三人とも そ
 の 山おくの 家から 三キロメートルも はなれた 村
 の 学校へ かよって いました。
 2 学校の じゅぎょうが 終わると、三人は いつも つ
 れだって 山おくの 家に 帰りました。

春の 山道には 花が たくさん さいて いました。
 たんぽぽ すみれ なの花 れんげ、その ほかに いろい
 ろな 花が さいて いました。

夏は 山道の 青葉が きれいです。秋に になると、木
 の 葉は だんだん 赤く なります。

3 三人の 子どもたちの 住んで いる 山おくには、



鳥も たくさん いました。

秋に なって つばめが 南
へ 帰って 行きますと、 かん
が 飛んで 来ました。 かんは
一れつに なったり かぎに
なったり して 飛んで 来ま
した。

森には もずも いました。
きつつきも いました。 ふくろ
うも いました。 きれいな き
じが 飛び立つ ことも あり

ました。 すみきった 秋の 空を、 とびが 大きな わを
えがきながら まって いる ことも ありました。

4 ある 日、 まさおくんのおとうさんが くりの 実
を たくさん 拾って 来て、 まさおくんたちに 分けて
くれました。

「くりの 木は どこに あるの。」
と、 まさおくんが 目を かがやかして たずねました。

「森の おくの 方に たくさん あるんだよ。」
と、 まさおくんのおとうさんが 答えました。

「ぼくたちも 行って みたいなあ。」
まさおくんが いました。 けれども まさおくん

おとうさんは 首を ふって、

「おまえたちは まだ 小さい
のだから、おまえたちだけで
決して 行っては いけない
よ。また わたしが 取って
来て あげるから。」

と いいました。

5 けれども まさおくんは、
くりの 木が たくさん ある
森の おくへ 行って みたく
て たまりません。



ある 日、まさおくんは、

「くり拾いに 行こうよ。」

と、あきおくと みつ子さんを さそいました。

「だめだよ。行っては いけないと おじさんが いった
じゃ ないか。」

「そうよ。帰れなく になったら たいへんだわ。」

あきおくと みつ子さんは、そう 行って まさおく
んを とめました。

6 なかよしの ふたりの 友だちにも とめられました
が、まさおくんは どう しても くりの 木の ある
所まで 行って みたくて たまりません。



「そこには くりの 木の ぼ
かに、きつと いろいろな
くだものの 木が あるに
ちがない。まっかな かき
も、いちじゆくも、もしか
したら 大きな りんごも
なって いるかも しれない。
きれいな 鳥も 歌って い
るだろう。行きたいなあ、行
きたいなあ。」
まさおくんは 学校でも 毎

日 その ことばかりを 考えて いました。おとうさん
に つれて 行って もらいたいと 思いましたけれど、
おとうさんは 毎日 いそがしく はたらいて います。
7 さむい 冬が 近づいて 来ました。朝の 山道には
じもが おりはじめました。つめたい 北風が ふいて、
耳や 鼻の 先が いたく なりました。

ある 日、学校の 帰りに まさおくんが いいました。
「ずっと ずっと 山おくの 森の 中には、とても き
れいな 所が あるんだよ。そこには やさしい おじ
さんが いて、おもしろい 話を たくさん 聞かせて
くれるんだ。みんなで 行って みようよ。」

あきおくんも みつ子さんも
だまって いました。

「ね、三人で これから 行っ
て みようよ。」

まさおくんは 山道の 中ほ
どから 森の 方へ、ひとり
どんどん 歩いて 行きました。
あきおくんも みつ子さん
も ついて 行きました。

8 三人は しばらく 歩いて
行きました。 森の 中は うす



暗く、地面は しめって いました。木の こずえを 風
が ひゅうひゅうと 通りすぎて 行きました。あきおく
んと みつ子さんは おそろしく なって きました。

「まさおくん、もう 帰ろうよ。」

「まさおさん、おそろく になると いけないから 帰りまし
ようよ。」

まさおくんは 聞えない ふりを して、だまって 進
んで 行きました。ひとり 先に なって どんどん 進
んで 行きました。

9 だんだん うす暗く なって きました。ザザザア
と いう 音が しました。



「あつ、雨だ。」

と、あきおくんが いました。

「はやく 帰りましょうよ。」

みつ子さんは なきだしそう
に なりました。

あきおくんと みつ子さんは
立ち止まりました。まさおくん
との 間が ずいぶん はなれ
てしまいました。

「まさおくん、ぼくたち もう
帰るよ。」

あきおくんが 後から 大きな 声で いました。ま
さおくんは、ちょっと ぶりかえっただけで その まま
進んで 行きました。

10 雨は だんだん はげしく なりました。その うち
に みぞれに なりました。あきおくんと みつ子さんは、
さむさに ふるえながら、歩いて 来た 道を もどりが
けました。まさおくんの すがたは もう 見えません。
あきおくんは みつ子さんの 手を 取って、いそいで
歩きました。ふたりとも びしょぬれに なって しまっ
ました。

11 あきおくんと みつ子さんは やっと 森の 出口に

来ました。ふたりは 助け合い
ながら やっと 家が見える
所まで 来ました。つかれきっ
て 早く 歩く ことが でき
ません。

「おうい おうい。」

ど、よぶ 声が しました。む
ここの 方から 三人の おど
うさんが 走って 来るのが
見えました。

12 まさおくんが いないので、

三人の おとうさんたちは、

「まさおは どう した。」

と 聞きました。

「まさおくんは あの 大きな けやきの 木の 所から
森の 方へ はいって 行って しまって——」。

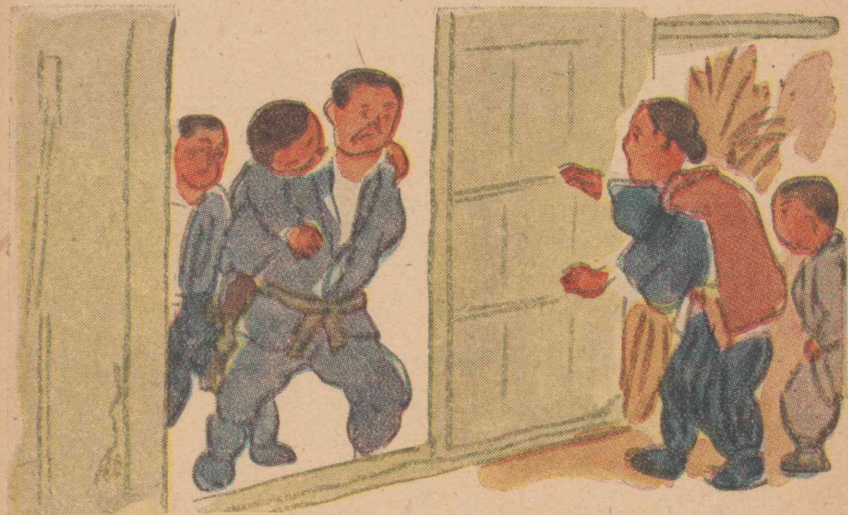
「けやきって、あの 大きな 岩の そばに ある けや
きかね。」

「そうです。」

あきおくんは なきがおに なって、そう 答えました。
おとうさんたちは 山道を 走って 行きました。

13 三人の おかあさんたちは まさおくんの 家で、ま





さおくんが ぶじに 帰って
 来るのを いのって いました。
 まさおくんの おかあさんは
 ないて いました。
 外は あいかわらず みぞれ
 が ふって います。
 がらっと 戸が あきました。
 おかあさんたちは 戸口へ 飛
 んで 行きました。 風が ろう
 そくの 火を 消しました。 三
 入の おとうさんたちが はい

って 来ました。 まさおくんは おとうさんの せなかで
 ぐったりと なって いました。

まさおくんの おかあさんは 大いそぎで きものを
 きかえさせました。 みつ子さんの おかあさんが いろいろ
 の 火を どんどん もやしました。 青白く なって い
 た まさおくんの かおに、 少し 赤みが 出て 来まし
 た。

「よかった、よかった。」

みんなは そう 言って よろこびました。

「先生の 紙しばいは これで おしまいです。」

先生は こう 行って、紙ぶくろの中へ 絵を しま
いました。

みんなは ほっと して、

「まさおくんは ぶじて よかったなあ。」

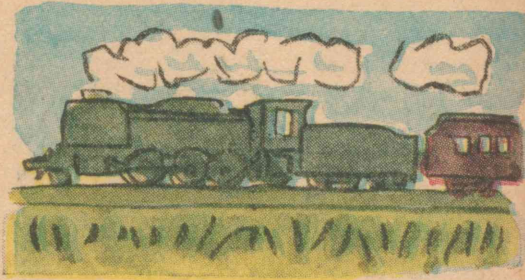
と 思いました。

先生は にこにこ しながら いました。

「いまの 紙しばいに 出て 来る まさおくんと いう

子どもが 先生なのですよ。ほんとうに らんぼうな

ことを した ものですね。」



六 一つの ことばから

(一) 変わる ことば

「はるおさん、『走る』と いう ことばで 短

い 文を 作って みましよう。」

「はい。」

「おかあさんも いっしょに 作って みますよ。」

はるおさんが 作りました。

汽車が 走る。どんどん 走れ。

みんな いっしょうけんめいに 走りました。

「おかあさん、これだけ できました。」

「そう。おかあさんも できました。」

おかあさんは そう 行って、つぎのような 文を は
るおさんに 見せました。

広い 通りを 電車が 走り、自動車が 走る。

はるおさんが おもちゃの 汽車を 走らせる。

走らないと 間に 合いませんよ。

もつと 早く 走れたら よいのにと 思いました。

さいごまで 走りたいと 思います。

「はるおさん、よく 見て ごらんなさい。『走る』と いう
ことばが いろいろに 変わりますね。『走れ』とも なる

し、『走り』とも なりますね。『走らせる』『走らない』『走
ら』と いうのも 『走る』の 変わった 形です。」

はるおさんは 『走る 走れ 走り 走ら』と 書いて み
ました。

「おかあさん、『走る』と いう ことばは、おしまいの 』と
ころが 『れ』とか 『り』とか 『ら』とかに なるのですね。』
「そうです。それでは こんどは 『読む』と いう ことば
で、作って みましよう。」

と、おかあさんが いいました。

はるおさんが 作りました。

わたくしは 本を 読む ことが すきです。

みんな いっしょうけんめいに 読みました。
もつと 早く 読めたら よいのにと 思いました。
おかあさんが 作りました。

本を 読む。早く 読め。本を 読み、字を 書く。
よく 読まないと わかりませんよ。

「はるおさん、『読む』と いう ことばも いろいろに 変
わりますね。どんな ちがった 形が あるか しらべ
て くらんなさい。」

「はい。『読む』『読め』『読み』『読ま』です。ことばの おしま
いが 『む』『め』『み』『ま』と なります。おかあさん、こと
ばって おもしろい ものですね。」



(二) ことばあそび

「おかあさん、はるおさん、ことばあそびを しまし
ましょう。」

「はるおさん どのな あそびですか。おかあさん。」

「おかあさんが 一つの ことばを いいますから、
はるおさんは それと つながりの ある ことば
を いえば よいのです。空と いったら はるお
さんは どのな ことばを 思い出しますか。」

「はるおさん 『青い』——『広い』——『高い』——」

「おかあさん 『そうですね。そんな ふうに いえば よいのです。』

では 出しますよ。花——」

さほるお 「赤い——白い——きれいな——」

さおかあ 「もつと ありませんか。」

さほるお 「さあ。」

さおかあ 「では おかあさんが いますよ。——さく——開」

く——散る——」

さおとう 「こんどは おとうさんが 出そう。いいかね。はる」

おの すきなものだよ。さとう——」

さほるお 「あまい——白い——」

さおとう 「赤い——赤いのも あったね。」

さほるお 「ええ。ぼく、あれが 一ばん あまかった。」

さおとう 「はっはっはっ。」

さおかあ 「ほっほっほ。——これも はるおさんの すきな

— 物ですよ。野球——」

さほるお 「投げる——打つ——走る——」

さおかあ 「新聞——」

さほるお 「読む——見る——」

さおかあ 「もつと あるでしょう。」

さほるお 「配る——」

さおかあ 「そうです。」

さほるお 「おかあさん、つながりの ある ことばって ずい

ぶん いろいろ ありますね。」

七 家ちく

(一) あきらさんの家で

あきらさんの家では馬の あおの ほかに、にわとりと ぶたを かって います。なやの うらに とり小屋と ぶた小屋が あります。

馬屋は 家の すぐ そばに あります。夜なかに よく こし板を けて いる ひずめの 音が 聞えます。そんな 時、おとうさんは すぐ 目を さまして、「どう どう、あお。」

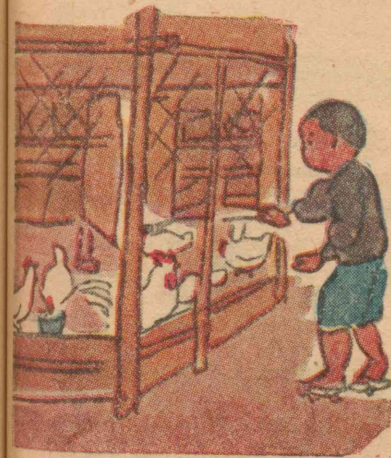
と いった なだめます。あおは おとうさんの 声を 聞くと すぐ 静かに なります。

あおが 一ばん いそがしいのは 春の 終る ころからです。田の 仕事は じまると、あおは 休む 間も なしに はたらきます。いねの かりいれの 時も さくもつを はこぶ 時も たきぎはこびの 時も、あおは いっしょうけんめいにはたらきます。

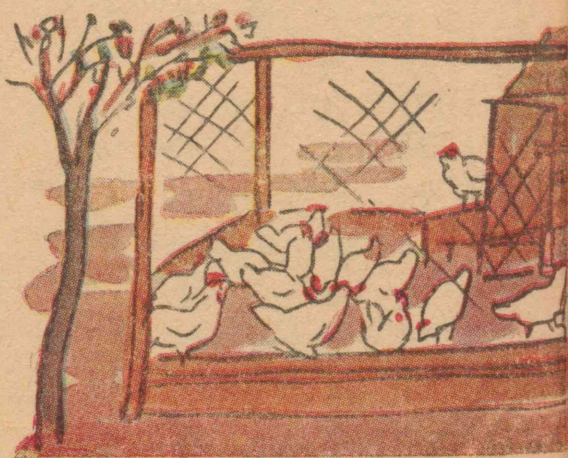


どんないそがしい 時でも あおは いやだとは い
 ません。 おとうさんも おかあさんも そんな 時には、
 「あおや、いつも ありがとう。」
 と いって、 たてがみを なでて やったり くびの 所
 を かるく ぽんぽんと たたいて やったり します。
 そして あおの すきな にんじんや からす麦を 食べ
 させます。

とり小屋には 二十ぱの レグ
 ホンが います。 コッコ コッコ
 と さわがしく なきながら、 日



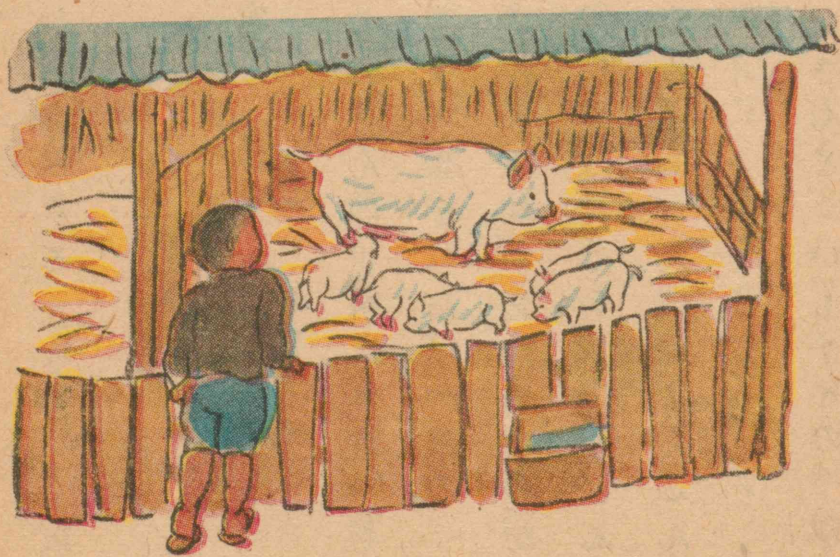
あたりの よい かこいの 中で
 えさを あさって います。 おじ
 いさんは どうもろこしや だい
 ずかすを 粉に して、 ぬかや
 魚の 粉などと まぜて やりま
 す。 あきらさんが 金あみの 中
 に 投げこんで やると、 大よろ
 こびで われさきにと 金あみに とびかかって 来ます。
 あきらさんの 家 に いる にわとりは レグホンばかり
 です。 はねの 色は みんな まっ白です。 となりの
 家には 茶色や 黒の にわとりも います。



二十ばの レグホンは 毎日 たまごを 十ぐらい う
みます。多い 時には 十五六も うんだ ことが あり
ます。レグホンは たまごを うませる にわとりで、お
じいさんの 話では、一年中 ほとんど 毎日のように
うみ続けるのも いるそうです。

あきらさんの 家では おもに おじいさんが にわど
りの せわを します。あきらさんも 手つだいます。ど
り小屋は そうじが 大切です。小屋が よごれると に
わとりは すぐ 病気に なります。あきらさんは とき
どき とり小屋の そうじを して すな場に くすりを
まいて やります。

ぶた小屋は 木戸の 所に
二つ あります。子ぶたの
は いて いる 小屋の 方
が、親ぶたの 小屋より 少
し 広く なって います。
去年の 秋、おかあさんぶ
たが 子ぶたを 五ひき う
みました。子ぶたたちが ち
ちを のんで いる かっこ
うは、ほんとうに かわいい





ものです。あきらさんは 学校から 帰ると、毎日 ぶた
小屋を のぞきに 行きます。

(二) はるおさんの 家で

毎朝、牛にゆう屋さんが はるおさんの 家に おいし
い 牛にゆうを 配って くれます。生まれたばかりの
おとうどの ひろしちゃんが のむのです。おかあさんが
ひろしちゃんの かわいい 口の そばに ちちの びん
を 持って 行って やると、ひろしちゃんは よろこん
で のみます。

ある 日の ことです。はるおさんと いもうどの ゆ

き子さんは、ひろしちゃんが 牛に
ゆうを のんで いるのを見て
いました。

その 時、ゆき子さんが、
「ひろしちゃんは 牛さんの 赤ち
ゃんですね。」

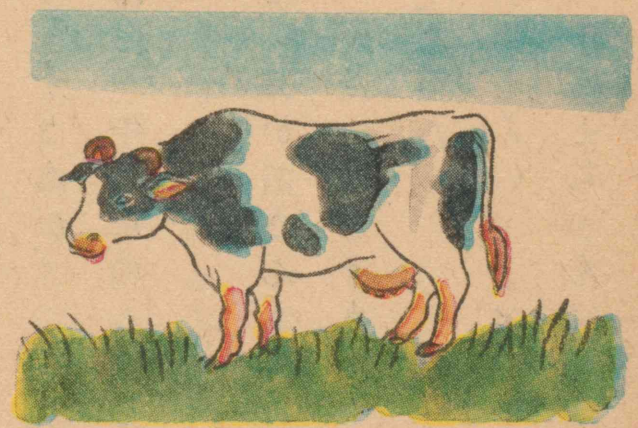
と いったので、おかあさんも 新
聞を 読んで いた おとうさんも
大わらいを しました。

「ゆき子は おもしろい ことを
いいますね。ひろしちゃんは 牛

の 赤ちゃんでは ありませんが、
牛の おちちを のんで 大きく
なるのです。ひろしちゃんばかり
で なく、はるおや ゆき子も
おとうさんや おかあさんも、い
ろいろと 牛の せわに なって
いるのです。

と、おかあさんが いいました。

おとうさんは 読んで いた 新聞を 下に おいて、
「そうだよ。わたしたちは 牛ばかりで なく、いろいろ
な 動物の せわに なって いるのだよ。きょうは



わたしたちが どんなに 動物の せわに なって い
るかを 話して あげよう。」
と いいました。

「さあ、次の 物は どんな 動物から 作られて いる
か、答えて ござらん。——おとうさんの はいて いる
くつは。」

「牛の 皮です。」

はるおさんと ゆき子さんが すぐ 答えました。

「そうだ。では、おとうさんの 大きな りよこうかばん
は。」

「それも 牛の 皮です。」

はるおさんが 答えました。

「そうだ。こんどは すこし むずかしいよ。——パンにつける バターは。」

はるおさんも ゆき子さんも 答えられません。

「バターは 牛にゆうから 作って あるのだよ。はるお」

も ゆき子も バターが 大すきだね。すると、ふたり」

とも ひろしと 同じように 牛の 子どもだね。では

はるおや ゆき子の すきな ハムは。」

「肉からです。」

はるおさんは おかあさんと 肉屋へ ハムを 買いに

行った ことを 思い出して そう 答えました。

「そうだ。ハムは ぶたの 肉で 作って あるのだよ。」

おとうさんは 続けて たずねました。

「こんどは もっと むずかしいよ。おとうさんの 着て

いる 洋服は なんて 作って あるかね。」

はるおさんも ゆき子さんも 答えられません。おとう」

さんは しばらく 待って いましたが、

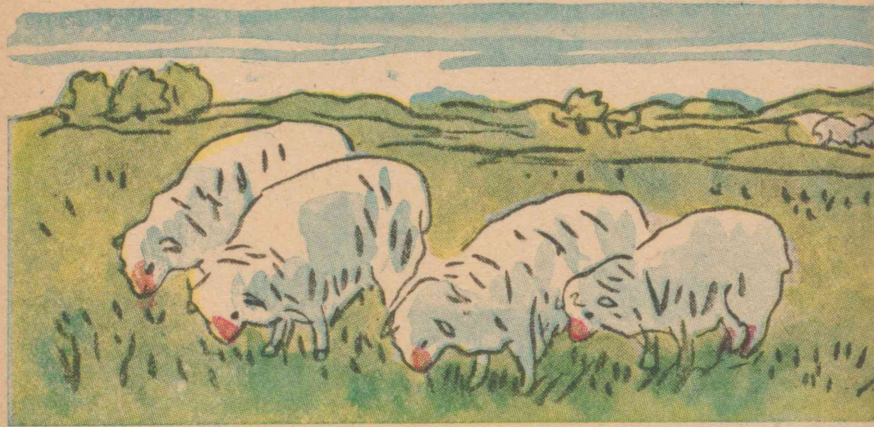
「わからないかね。——ひつじの 毛から 作るのだよ。」

と いいました。

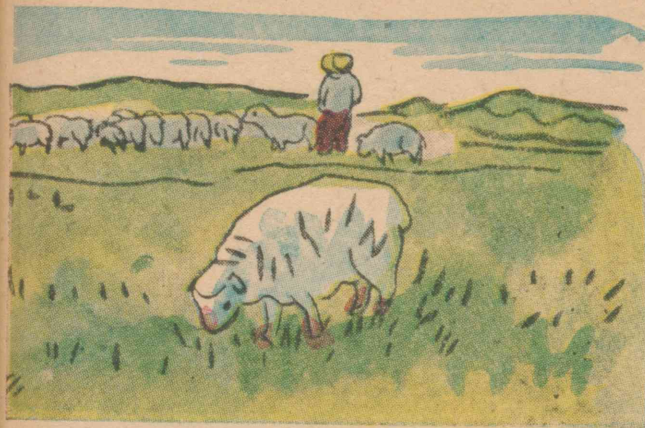
「ひつじって いつか 動物園で 見た ひつじですか。」

と、はるおさんが いいました。

「やぎさんに いて いるのでしょう。」



に立つ 動物を かって いる
 のだよ。いま いったように 牛
 や ひつじや その ほか 馬、
 やぎ、ぶた、にわとりなどを か
 っ て いるのだ。こう した 動
 物を 家ちくと いうのだよ。
 と いいました。
 「それでは しるも 家ちくですわね。」
 はるおさんが たずねました。
 「そう そう。いぬも ねこも 家
 ちくだ。いぬは 家の ばんを



と、ゆき子さんが いいました。
 「そうだよ。ふたりとも 知って いるね。」
 そう いった、おとうさんは 本ばこから 一さつの
 しゃんしゅうを 取り出しました。
 しゃんしゅうには、たくさんの
 ひつじが 広い 野原で あそんで
 いる ところが ありました。
 「ひつじは こう して かって
 いるのだよ。」
 おとうさんは そう いったから、
 「このように 人は いろいろ 役

するし、ねこは、ねずみを
たいじするね。みんな、人
の役に立つ動物なの
だよ。

はるおさんは、おとうさん
の話を聞いて、いる、う
ちに、毎日、いろいろな、動
物の、せわに、なっ、て、い、る、
と、い、う、こ、と、が、よ、く、わ
かりました。

はるおさんは、ゆき子さん

と、い、っ、し、ょ、に、お、も、て、に、出、ま、し、た。

「しろ、しろ。」

はるおさんは、大きな、声で、しろを、よびました。ト
ろが、おを、ふって、飛んで、来ました。はるおさんは

しろの、あたまを、なでながら、

「しろ、おまえは、家ちくだよ。」

と、い、い、ま、し、た。

「しろは、家ちくだよ。」

と、そばから、ゆき子さんも、い、い、ま、し、た。

しろは、きよとんと、した、かおを、して、ワンと、ほ
えました。



八 着 物

学校の 教室の 戸だなの中、で、小さな ガラスの ひょう本びんに はいっ
た まゆと わたと よう毛が じまん話を 始めました。

一の場面

よう毛 「わたくん わたくん。ぼくは 毎日 こんな 小さ
な ビンの 中に とじこめられて いて、たいく
つで しかたが ないので。ちよつと 校庭に
出て みませんか。」

わた 「さんせい さんせい。ぼくも 表に 出て みたい
と 思って いたのですよ。まゆさんは どうです
か。」

まゆ 「そうですわね。でも わたくしは 外に 出ては い
けないと 思いますわ。もし わたくしたちが い
なく なったなら、みなさんが 勉強するのに、こま
るでしょう。わたくしは やはり この 中に い
た 方が よいと 思います。」

よう毛 「そうだ。ぼくの 考えが いけなかった。それでは
ぼくたちの 生まれた 国の 話でも しようでは
ありませんか。わたくん、きみから 聞かせて く



がめでは、ぼくの 生まれた 国も 負けませんよ。
 ぼくの 国も 海の 向こうの あたたかい 国で
 すよ。 広い 広い はてしの な
 い 牧場で ぼくは 生まれたの
 です。 その 時 ぼくは ひつじ
 の 毛だったのです。 ぼくは ひ
 つじの せなかに ふさふさと
 はえて いました。 夕方、 ひつじ
 かいの ふえの 音で ひつじ小
 屋に 帰る 時、 夕日が あかあ
 かと ぼくたちを そめました。

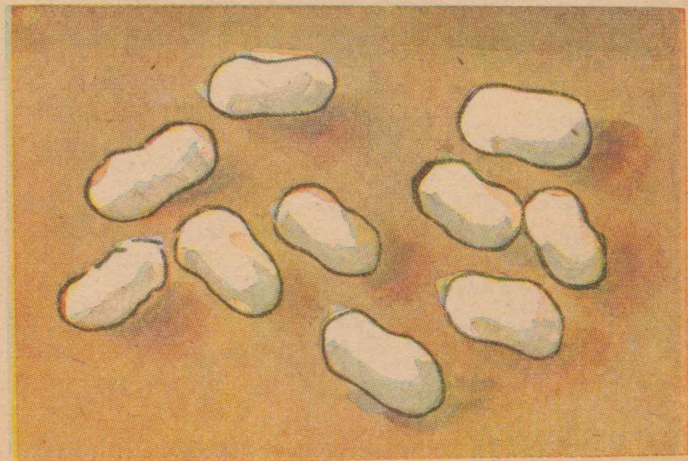
れませんか。

わた「ぼくは 海の 向こうの
 あついで 国で 生まれまし
 た。 秋に なるど、 広い
 広い 平野は 一面に ぼ
 くとちの 花ざかりです。
 ぼくたちの なかまで あ
 たりは まるで 白い 海
 のように なります。 き
 みたちに 見せたいくらいですよ。
 ようも「わたくん、 ちよつと 待って ください。 広い な



その 美しさは 今 思い
出しても わすれられませ
んよ。

まゆ 「わたくしの 生まれた 国
は この 日本です。あな
たがたのような 広い国で
は ありません。みどりの
山に かこまれた 小さな
村で 生まれたのです。お



とうさんや おかあさんは かいこです。おひやく
しょうの 家で、おとうさんや おかあさんは お
いしい くわの 葉を 食べて、 わたくしを うん
で くれました。」

わた 「まゆさんの 国は 近くて いいですね。」

まゆ 「ええ。でも わたさんや よう毛さんは、よく こ
んな 遠い わたくしの 国に 来て くださいま
したね。ずいぶん 長い 旅だったでしょうね。」

よう毛 「そう、長い 旅でしたよ。でも 日本では ぼくの
なかまは あまり 生まれませんからね。ぼくたち
が 大ぜい 来て、毛糸に なったり 毛おり物に
なったり、冬の 着物に なったり して あげて
いるのです。」

わた 「ぼくが 来たのも その ためですよ。 ぼくたちも
今では 日本で ほとんど 生まれません。 だから
ぼくたちも 大ぜい 来て、 着物や ふどんの わ
たに なったり もめん系に なったり して い
るのですよ。」

まゆ 「よう毛さん、 わたさん、 ほんとうに ごくろうさま
です。」

わた 「いいえ、 どう いたしまして。 まゆさん あなたが
ただって きぬ系に なったり きぬおり物に な
ったり して、 ずいぶん ぼくの 国へも 来て
くれるでは ありませんか。」

よう毛 「そうですね。 おたがいさまですよ。 みんな なかよ
く しまししょう。」

わまたゆ 「そう、 なかよく しまししょう。」

二の場面

よう毛 「わたくん、 ぼくたち ふたりとも はるばる 遠い
国から 来ました。 どちらが よけいに 役に
立って いるのでししょうか。」

わた 「それは ぼくの 方でししょう。」

よう毛 「おや、 大変な ごじまんです。 それは いったい
どう してですか。」

わた「それは、きみは 冬の 着物に なるだけですが、
ぼくは 冬でも 夏でも 一年中 役に 立つから
ですよ。冬は わたいれから 下に 着る はだ着
にまで なります。それに 夏の シャツや スポ
ンは ぼくで なくて は ならないでしょう。」
よう毛「なるほど、きみは ずいぶん お役に 立ちますね。
でも、むかし 日本の人 は 着物ばかりを 着て
いたから、きみだけで よかったでしょうが、今は
みんな 洋服を 着るようになつたのですからね。
洋服に なるのは ぼくたち 毛糸や 毛おり物で
すよ。」

まゆ「わたしさん、よう毛さん、おふたりの おっしやる
ことは よく わかりました。おふたりとも わた
くしの 国には、なくては ならない かがたで
す。これからも わたくしの 国の ために はた
らいて ください。」

この 時、三年生の よし子さんが 教室に はいって 来ます。きょうは 学
げい会の 日です。よし子さんは おどりを するので、きれいな 着物を 着て
います。

よう毛「おや、よし子さんが はいって 来た。きれいな
着物を 着て いるなあ。」

わた「目が さめるようだね。なんと 美しいんだらう。」

きつと きぬおり物に
ちがいない。まゆさん、
あれは あなたの なか
まですね。】

まゆ 「はい、そうです。着物ど
はおりは めいせんです。
赤い おびは ちりめん
です。みんな わたくし
の なかまです。】

わたし 「まゆさんの なかまは
いつも きれいで うらやましい。】



まゆ 「わたし、あなたも 美しいですよ。よし子さんの
まっ白な たびは あなたの 友だちでしょう。】

わたし 「ああ、そうだ。あの たびは もめんです。】

まゆ 「ぼくの なかまも いますよ。よし子さんの 手く
びの 所に ちらっと 見えるでしょう。あの 赤
い 毛糸が そうですよ。】

まゆ 「そうですね。わたくしたち 三人は いつも なか
よく 手を つないで いるのですね。】

まゆ 「そうですね。みんな なかよく 手を つないで
行くのですよ。】

まゆ 「まあ、うれしい。みんなで そう しましうね。】

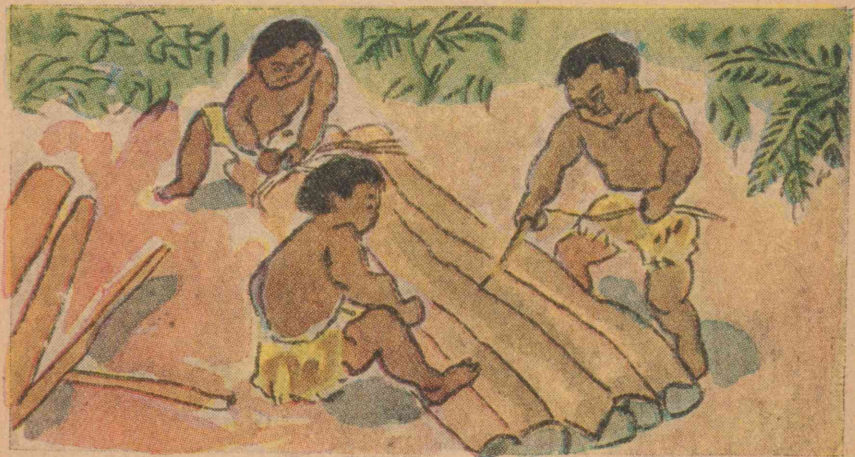


いで 行こうかと 思いましたが、どち
 ゅうで おそろしい わにが 出て 来
 るかも しれないと 思いました。考え
 て いると、川上から 木が 流れて
 来ました。この 木に 乗れば 向こう
 岸に わたれると 思いました。しかし、
 まるい 木の上では よほど 注意し
 て いないと、くるりと 回って 水の
 中に 落されて しまいます。そこで
 まるい 木を 何本も ならべて、つる
 草などで くくりあわせると よいと

九 ふね

(一) ふねの 発達

遠い むかしの ことでした。
 川の 向こう岸に おいしそ
 うな くだものが なって いまし
 た。こちら側の 川岸に いた
 人が それを 取りたいと 思
 いました。どう して 取りに 行
 こうかと 考えました。川を 泳



思いました。そうして向こう岸にわたって行きました。これがいかだの始まりです。大むかしの人は、このいかだに、乗って、木の切れはして、水をかきながら、川や湖をわたったのです。

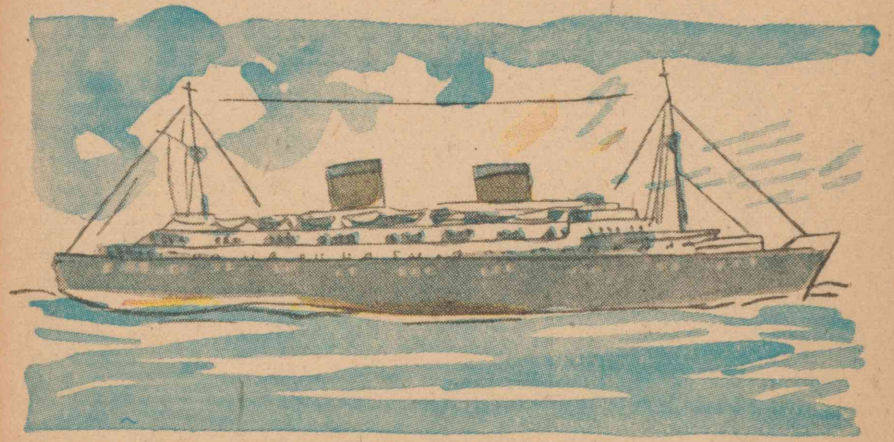
そのうち、石で作ったおのて、大きな木を切り、まん中をくりぬいたものを作りました。木ぎれで、かいても作りました。これが、まる木ぶねといわれるものです。

まる木ぶねは、いかだとちがって、かんたんに乗ります。回すことができるし、早くこぐこともできます。大むかしの人たちは、このまる木ぶねに乗って、川

を上ったり、下ったり、湖をわたったりして、魚を取りました。

けれども、静かな川や湖なら、まる木ぶねでもよいのですが、海のような、あらい波の立つ所では、すぐ大きな波のために、ひっくりかえって、しまいます。そこで、むかしの人は、海の上を走るには、もっと大きくも





つと しっかり 作られた ふねで
なければ ならないと 考えました。
こう して だんだん 大きな
ふねが 作られるようになりまし
た。はじめの うち、ふねは 魚を
取ったり、川や 湖を わたったり
するのにだけ 使われて いました。
時が たつに つれて、ある 土地
から べつの 土地へ いろいろの
物を はこぶのにも 使われるよう
になりました。

今では 非常に 大きな ふねが 作られて います。
この ふねに 乗って、たくさんの 人たちが 何日も
何十日も 旅を 続けて、広い 海を わたって 行きま
す。こう した 大きな ふねには たくさんの へやが
あります。うんどう場も プールも あります。毎日 家
に いるような 気持で 海の 旅を 続ける ことが
できます。

いろいろな 国の 人々が、いろいろな 用事で ふね
の 旅を します。ふねは 知らない 国の 人と 人と
を なかよく させます。ふねに 乗って 遠くへ 出か
けて 行く ことは、なんと いう 楽しい ことでしょう。



ある日、コロンブスが海をながめてみると、進んで行くふねがだんだん海の向こうにしずんで行くのを見ました。そして地球はまるいにちがいないと思いましたが、この広い海をどこまでも西へ西へと行けば、必ず向こうにあるたからこの国に行けるだろうと思いましたが、コロンブスは一日



今から五百年ばかりむかし、イタリアのある港町に、ふねに乗るここの大へんすきなコロンブスといふ人がいました。

(二) コロンブスの発見

そのころは、まだ地球がまるいといふことがよく知られていませんでした。海をこえた向こうにべつの国があると、いふこともわかりませんでした。

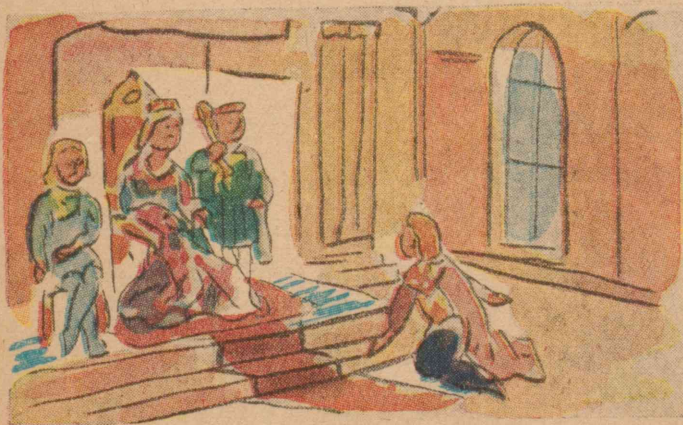
も早く海をわたって行きたいと 思いました。けれども 広い海を いく日も かかって 行くには、よほど りっぱな ふねで なければ なりません。そこで コロンブスは 会う 人ごとに その 話を しましたが、だれも わらって あい手に して くれません。大きな ふねを 自分で 作る お金の ない コロンブスは それでも 根気 よく 会う 人ごとに その 話を くりかえしました。

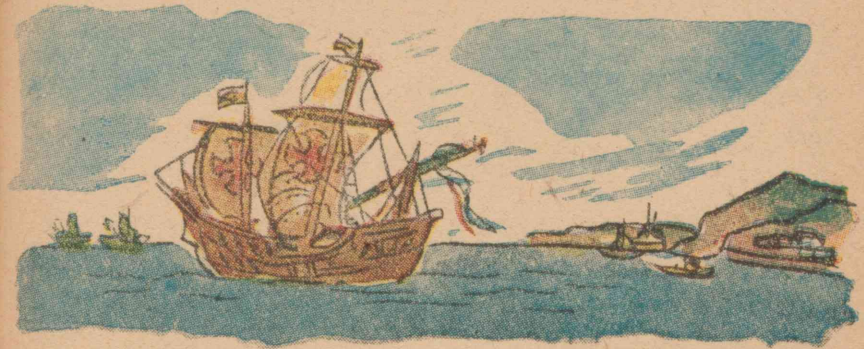
いつか 十年 あまりも たって しまいました。ある 時 コロンブスは スペインの イサベラ女王に 会いました。

「海を わたって 西へ 西へと 行けば、きっと たか
らの 国に 着く ことが できます。わたくしは 十
五年も そう 考えて きました。」
「十五年も 考えて いたのですか。
わたくしが ゆびわを 売って
りっぱな ふねを 作って あげ
ましょう。」

この 女王の 言葉を 聞いて、
コロンブスは なみだを 流して
よろこびました。

やがて 女王から 三ぞうの 大



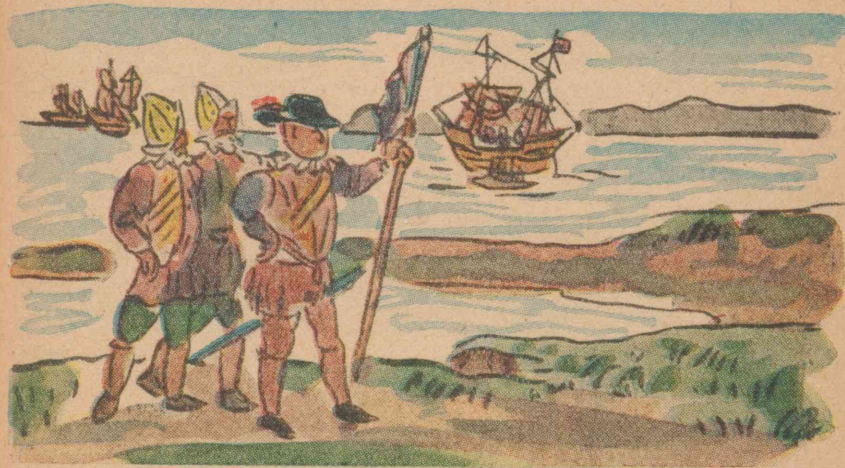


きな ふねが コロンブスに おくられ
ました。コロンブスは じゅんびを ど
どのえて スペインの 港を 出ました。
コロンブスは 三ぞうの うちの サ
ンタ・マリアと いう ふねに 乗りま
した。

ふねは 西へ 西へと 進みました。
ひと月 たっても 五十日 たっても、
何も 見えません。見えるのは ただ
ひろびろと した 海ばかりです。いっ
しよに 乗りこんで いた 人たちは、

コロンブスの 考えが まちがって いると 思うように
なりました。

「どこまで 行っても 同じですよ。もう 帰りましょう。」
と いう 人も ありました。それでも コロンブスは
どんだん ふねを 進めました。しかし いく日 たって
も 何も 見えません。しまいには どう しても スペ
インに 帰ろうと いう 者が ふえて きました。
「もう 三日 待って くれなやか。わたくしは けさ
向こうの 方へ 鳥が 飛んで 行くのを見たんだよ。
きっと 島か 何かがあるに ちがいない。」
と、コロンブスは 力強く いいました。三日 たつと、



海の上に赤い実のついた木のえだがういているのを見つけました。しばらくして、先に進んでいたふねから陸地が見えたという合図がありました。人々はたがいにだきあってよろこびました。こうしてコロンブスはやっど島に着くことができました。そしてまもなく大きな陸地を発見しました。

べんきょうの手びき

一 空

(一) 雲

1 「雲」のしをいくどもよんで、本を見ないでもいえるようにけいこしましょう。

2 雲をじっと見ていると、なぜおもしろくなってくるのでしょうか。

(二) にじ

1 いくどもよんで本を見なくても書けるようにけいこしましょう。

2 あなたは、にじの橋をわたってどこへ行けるように

思いますか。みんなて話し合ってみましょう。

3 このしを作った人は、どこでにじの橋をながめていたのでしょうか。なぜこのしを書いてみたくなったのでしょうか。

4 「にじ」のしの中にはちょうどしのよい所があります。そこはなぜちようしがよいのでしょうか。

(三) 空

1 このしはどんなかんじにするのですか。「雲」や「にじ」

の しど くらべて 話し合っ
て みましよう。

2 この しに 書かれて いる
所は、どんな 所のように 思
いますか。みんなて 話し合っ
て みましよう。

3 あなたも、「空」の しを 作っ
て ちょうめんに 書いて ご
らんさい。

ニ ラジオ

(一)

1 学校ほうそうで 聞いた 「金
魚」の 作文は うまい 作文
です。なぜ うまいか、みんな
で 話し合って みましよう。

2 書き方の けいこ。

たいわの けいこを しましよ
う。

(三)

1 ラジオの 作文で 何の こと
が 一ばん 長く 書いて あ
るでしょう。ちょうめんに
書いて みましよう。

2 本と ちがう かなつかいの
所を なおましよう。

おじいさんの ゆう とおり
かさお 持って 行って よ
かったと 思お ことが い
くども あります。

三 学級文庫

(一) 自治会

1 自治会とは どんな ことを

明かるく 晴れた 空。かきの
実が 赤い。元気 よく 学校
へ 行きました。国語の 時間
は おもしろい。音楽が 聞え
て くる。金魚と いう 作文。
3 つぎの 文は どう ちがうて
しょうか。

ぼくは おふるに、おじいさ
んか おとうさんと いっし
よに はいります。
ぼくは おふるに、おじいさ
んや おとうさんと いっし
よに はいります。

(二)

みんなも それぞれ おじいさ
んや あきらさんに なって、

する 会が、みんなて 話し合
って みましよう。

2 自治会で どんな 話し合いが
あったか、本を 見て ちょう
めんに 書いて みましよう。

3 書き方の けいこ。
黒板に 自治会と 書きました。
みんなて 学級文庫の ことを
考えました。

(二)

話し合い
1 学級文庫を 作る ために、み
んなは どんな 考えを 話し
たか、ちょうめんに 書き取っ
て みましよう。

2 先生は 学級文庫を どう し
て 作ったら よいと おっし

やいましたか。ちようめんに
書いて みましよう。

3 書き方の けいこ。

お金を 出し合つて 本を 買
います。

学用品を 買うのに お金が
いりません。

(三)

学級文庫

1 学級文庫の 本が 百二十五さ
つに なつた わけを ちよう
めんに 書いて みましよう。

2 学級文庫の いいんは どん
な ことを するの か、本で しら
べて ちようめんに 書きま
しよう。

3 書き方の けいこ。

工作の 時間に 本を なおし
た。

全部の 本に ばんごうを つ
けた。

本は 借りて 行って うちで
よむから 平気さ。

四 ぼくは 電気だ

1 電気は どこで 生まれ、どこ
を 走り、どこに 行き、何に
なつたか、本を 見て ちよう
めんに 書いて みましよう。

2 つぎの ことばを 使って み
じかい 文を 作つて みま
しよう。

発電機。そう電線。全速力。

3 書き方の けいこ。

電燈を つける。全速力で 走
る。電車や 汽車。公園。

五 山の 子ども

1 三人の 子どもの 住んで い
る 所を どんな 所と 思
いますか。みんなて 話し合つて
みましよう。

2 まさおくん、あきおくん、みつ
子さんの 三人を どんな 子
どもと 思いますか。みんなて
話し合つて みましよう。

3 この 紙しばいの 文を よん
で、あなたは どんな ことを
考えましたか。考えた ことを
ちようめんに 書いて みま
しよう。

4 十三まいの 紙しばいの 絵を
作りましよう。絵が てきたら、
みんなて やつて みま
しよう。

六 一つのことばから

(一) 変わる ことば

1 はるおさんは、変わる ことば
を 考えたので うれしかった
でしようね。あなたも 「作る」
と いう ことばで、考えて
ちようめんに 書きま
しよう。

2 どんな ことばが 変わる こ
とばで どんな ことばが 変
わらない ことばか、考えて
みま
しよう。

(二) ことばあそび

1 みんなも ことばあそびを し

ましよう。「ラジオ」に つなが
りの ある ことばを 使って
ごらん下さい。

2 「雪」に つながりの ある こ
とばを 使って ごらん下さい。

七 家ちく

(一) あきらさんの 家で

1 あきらさんの 家では、どんな
動物を かって いますか。

2 おとうさんや おかあさんや

あきらさんは あおを どんな
に かわいがって いますか。

3 あおは、あきらさんの うちに
どんなに やくに たって い
ますか。ちようめんに 書いて

みましよう。

4 次の ことばを 使って 短い

文を ちようめんに 書いて
みましよう。

なだめます。休む 間も なく。

5 あきらさんの うちには どん

なにわどりが いますか。そ

の にわどりを だれが せわ
して いますか。

6 にわどりは どんな ものを
たべますか。

たべますか。

7 次の ことばを 使って 短い

文を ちようめんに 書いて

みましよう。

ほとんど。おもに。

8 書き方の けいこ。

魚の 粉。金あみ。投げこみま

す。たまごを うみ続ける。病

気になりませす。親ぶたの小

屋。去年の 秋 生まれました。

(二) はるおさんの 家で

1 人間は 動物たちの せわに
なって います。どんな せわ

に なって いるか、みんなて

本を 読んで ちようめんに

書いて みましよう。

2 この 文を 読んで どんな

ことを 考えましたか。ちよう

めんに 書いて みましよう。

3 次の ことばを 使って みんな
なて 話を して みましよう。

りよこうかばん。家ちく。

きよとんと した かわ。

4 書き方の けいこ。

毎朝、牛にゆうを 配る。新聞

を 読んで いる。動物の せ

わ。牛の 皮。洋服を 着る。

動物園。広い 野原。

ハ 着物

1 この げきを 早く おぼえて

みんなて げきを やって み

ましよう。

2 わたの 生まれた 国の よう

すを、本から 書き取って み

ましよう。

3 よう毛の 生まれた 国の よ

うすも 本から 書き取って
みましよう。

4 本を 見て、わたから 作った

物や、よう毛から作った物
や、まゆから作った物を、
ちようめんに書き取ってみ
ましょう。

5 書き方の けいこ。

教室の 戸だな。じまん話を
始めた。場面。校庭。表に出
てみる。勉強する。広い。平
野。牧場。長い。旅。冬の着
物。遠い。国。美しい。着物。

九 ふね

(一) ふねの 発達

1 大むかしの 人々が、一ばん
はじめに 考えた ふねは、ど
んな ふねだったでしょうが。
2 まる木ふねは、いかだよりも

どんな 所が よかったの
でしょうが。

まる木ふねは、どんな 所が
わるかったのでしょうが。

3 今の ふねは、どんなに 発達
して いますか。本を 読んで
ちようめんに 書いて みまし
ょう。

4 「ふねの 発達」と いう だい
で、みんなと いっしょに 話
を して みましょう。

5 書き方の けいこ。

川の 向こう岸。川を 泳いで
行く。川を 上ったり 下った
り する。静かな 湖。非常に
大きな ふね。気持の よい

旅。いろいろな 用事。

(二) コロンブスの 発見

1 今から 五百年ばかり むかし
の 人は、地球を どのように
考えて いたでしょうが。
2 地球は まりのように まるい
もので ある ことを、コロン
ブスは どう して 考えたの
でしょうが。

3 コロンブスが 大きな 陸地を
発見するまでの つらかった
ことを みんなで 話し合いま
しょう。

4 コロンブスを たすけた 人は
どんな 人でしょうが。

5 コロンブスの えらい ところ

を 本を 読んで 見つけて
みましょう。

6 書き方の けいこ。
地球を 知らなかった。必ず
行けると 思った。女王の 言
葉を 聞いて よろこぶ。大き
な 陸地の 見えた 合図。陸
地の 発見。島が 見えて き
た。

新しく 出た おもな ことば

○あい手 (108)
 あさる (75)
 ○いいん (33)
 いかた (102)
 イサベラ女王 (108)
 いちじゆく (54)
 いったい (95)
 いななく (10)
 いなほ (9)
 いのる (62)
 いろり (63)
 ○うれる (11)
 ○えいがかん (43)
 えがく (51)

○おどぎの 国 (7)
 おの (102)
 ○かい (102)
 かいこ (92)
 かかし (9)
 学げい会 (97)
 学用品 (30)
 かこむ (16)
 家ちく (72)
 学級文庫 (22)
 かつこう (77)
 変わる (65)
 がん (50)
 かんそう (12)

○まじ (50)
 まつつま (50)
 きぬおり物 (94)
 牛にゆう (78)
 ○配る (71)
 要 (4)
 くりぬく (102)
 ○けやき (61)
 ○公園 (43)
 工作 (32)
 こがね (9)
 国語 (11)
 こずえ (57)
 こたつ (5)

根気 よく (108)
 ○さいしょ (30)
 さくもつ (73)
 さめる (11)
 さんせい (27)
 ○自治 (22)
 じつきようほうそう (21)
 島 (111)
 じまん話 (88)
 しも (55)
 シヤツ (96)
 少女 (42)
 少年 (42)
 ○スイッチ (12)
 すすき (10)
 スポン (96)

○精米き (40)
 全速力 (39)
 ○そう電線 (38)
 そめる (91)
 ○たいくつ (88)
 だいずかす (75)
 たいじ (86)
 たから (107)
 助け合う (60)
 たなびく (5)
 たなび (99)
 たれる (9)
 ○地球 (106)
 ちりめん (98)
 ○つながり (69)
 つる草 (101)

つれたつ (49)
 ○天気よほう (20)
 電柱 (45)
 ○どうもろこし (75)
 土地 (104)
 とどのえる (110)
 とび (51)
 ともる (39)
 ○なだめる (73)
 なや (72)
 なるこ (9)
 ○にぎやかな (44)
 にじ (6)
 日本 (92)
 ○ぬか (75)
 ○はおり (98)

非 (105)	負 (91)	洋 (83)	散 (70)	鼻 (55)	園 (43)	工 (32)	去 (13)	黄 (7)
常 (105)	牧 (91)	服 (83)	静 (73)	進 (57)	紙 (46)	全 (33)	買 (13)	原 (8)
港 (106)	遠 (93)	毛 (83)	休 (73)	止 (58)	絵 (47)	部 (33)	死 (14)	頭 (9)
必 (107)	糸 (93)	教 (88)	食 (74)	助 (60)	売 (47)	借 (35)	配 (14)	引 (9)
王 (108)	達 (100)	室 (88)	粉 (75)	消 (62)	毎 (48)	広 (38)	拾 (15)	馬 (10)
言 (109)	泳 (100)	始 (88)	続 (76)	変 (65)	炭 (48)	速 (39)	終 (16)	明 (11)
者 (111)	注 (101)	庭 (88)	次 (81)	短 (65)	葉 (49)	数 (39)	級 (22)	実 (11)
島 (111)	意 (101)	表 (89)	皮 (81)	読 (67)	飛 (50)	燈 (39)	庫 (22)	語 (11)
陸 (112)	回 (101)	勉 (89)	肉 (82)	字 (68)	決 (52)	精 (40)	治 (22)	楽 (12)
囿 (112)	湖 (102)	向 (90)	着 (83)	開 (70)	歌 (54)	公 (43)	品 (31)	魚 (12)

はげしい (59)
 バター (82)
 はだ着 (96)
 はたらく (43)
 発見 (106)
 発達 (100)
 発電きさん (37)
 はてし (91)
 鼻 (55)
 ハム (82)
 場面 (88)
 はるばる (95)
 バン (82)
 ○ビーデーエー (34)
 日ざし (11)
 びしよぬれ (59)

(59) (11) (34) (82) (95) (88) (82) (55) (91) (37) (100) (106) (43) (96) (82) (59)

ひすめ (72)
 ひっくりかえる (103)
 ひつじ (4)
 ひょうし (32)
 ひょう本びん (88)
 ○プール (105)
 ふくろろ (50)
 ぶじ (62)
 ○平気 (35)
 平野 (90)
 ○まきば (10)
 まちがう (111)
 まっしぐら (45)
 まゆ (88)
 まる木ぶね (102)
 短い (65)

みぞれ (59)
 ○めいせん (98)
 ○もず (50)
 ○やりとける (37)
 ○ゆびわ (109)
 ○洋服 (83)
 よけい (95)
 より道 (39)
 ○らんぼうな (64)
 ○陸地 (112)
 りょこうかばん (81)
 ○レクホン (74)
 ○ろうそく (62)
 ○わた (88)
 わに (101)
 われさきに (75)

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男
芸術院会員
東京高等師範学校教授 岩井良雄

編集委員 国立国語研究所員 岩淵悦太郎
民俗学研究所理事 大藤時彦
東京杉並第四小学校校長 上飯坂好実
東京都立西高校教諭 鳥山榛名

東京書籍株式会社編集部

挿絵及び装釘

山下大五郎

あたらしい こくご 三年下(小) 学 校 (第二学期後期用) 小国三〇八

昭和二十五年三月二十五日 印刷
昭和二十五年七月十日 発行
(昭和二十四年十月十日 文部省検定済)

定価 円

著作者

東京書籍株式会社編集部
代表者 藤田貞次

発行者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 長 得 一

印刷者

東京都台東区二長町一番地
凸版印刷株式会社
代表者 山田三郎太

Approved by Ministry
of Education
(Date Jan. 10, 1950)

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装釘登録中)



広島大学図書

0130449653



東京書籍株式会社

文庫

49

653